

## 論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 宇澤美子

## 論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之  
文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 高宮利行  
文学研究科委員、Ph.D.

副査 タフツ大学教授 スーザン・ネイピア (Susan Napier) Ph.D.

学識確認 文学部教授 巽 孝之

論文題目 ハシムラ東郷—イエローフェイスのアメリカ異人伝

<主論文> ハシムラ東郷—イエローフェイスのアメリカ異人伝

<副論文> “‘Will White Man and Yellow Man Ever Mix?’ Wallace Irwin, Hashimura Togo, and the Japanese Immigrant in America” (『白人と黄人は混淆するか?』—ウォラス・アーウィン, ハシムラ東郷, 在米日本人移民、*The Japanese Journal of American Studies* 17[2006]: 201-22)

“From ‘Mark Twain’s Pet’ to ‘Merican Jap’: The Strange Career of Wallace Irwin’s Hashimura Togo” (『マーク・トウェインのお気に入り』から『めりけん・じゃっぶ』へ—ウォラス・アーウィン作ハシムラ東郷の怪遍歴」*Mark Twain Studies* 2[October 2006]:120-41)

宇澤美子君の本論文は、20世紀前半のアメリカで一世を風靡した疑似日本人コラムニスト「ハシムラ東郷」の全貌を膨大な資料によりあとづけ、その歴史的、文学的、社会的意義を提示するものである。東郷は従来、単なる「東洋人戯画」の一つにすぎないと片づけられてきた。だが、本論文は彼を人物造型した原作者ウォラス・アーウィンやアメリカ大衆読者層、同時代在米日系人社会、さらにはイラストレーターたちにとって、それぞれに異なる東郷のありようを重ね合わせることで、より複合的な同時代東郷像を再構成し、この「東洋人戯画」の背後に世紀転換期アメリカの文化的変動を透視しようとする点で先例のない、画期的な研究である。

主論文各章は以下のように構成されている。

## 序 章

### 第一章 謎の日本人コラムニスト、ハシムラ東郷あらわる

連載開始 / 疑惑 / トウェインの「お気に入り」 / <ずれ>の異化作用 / 兄、ウィル・アーウィンと日本人問題 / 「われらが高潔なる盟友たち」 / 「白」の錬金術 / 学僕の異種混淆 / 在米日系人たちからの反響 / 肖像写真を読む / 「黄禍」 / 日本人白人種説 / 東郷化

### 第二章 ウォラス・アーウィンの教育——イエローフェイス作家への道

ウォラス・アーウィンの同時代評価 / 中西部カウボーイズ / スタンフォード大学 / モデルは兄？ / 失われたチャイナタウンを求めて / トウェインの書いた中国人 / ミスター・ドゥーリー / ペルソナ詩の実験

### 第三章 家政夫は見た——史上最悪の使用人が語る「使用人問題」の真相

長期連載 / 東郷がマスターできない清潔 / 『グッド・ハウスキーピング』 / 東郷の陽気な米文法 / 使用人問題

### 第四章 オノト・ワタンナの日本小説玉手箱——同時代イエローフェイス事情（１）

「日本（人）風」を装う作家 / なぜ中国系のワタンナが日系のふりをしたのだろう？ / 僻地日本への情熱 / 『日本鷲』観光小説 / アール・ヌーヴォーの舞姫 / 二人の浦島と乙姫の悲劇 / ハーン「夏の日の夢」

### 第五章 ヨネ・ノグチの不思議の国の朝顔——同時代イエローフェイス事情（２）

戯曲『日本鷲』を観た日本人 / ノグチのワタンナ論 / 朝顔嬢小説 / お嬢様の個性 / なぜ朝顔君ではなかったか？ / 挿絵画家エトウ、ワタンナとの接点 / ノグチのペン画 / 『書簡』——不思議の国のジャポニズム

### 第六章 ハシムラ東郷、異種格闘する——『日ノ本』対『ハシムラ・トーゴー』

親日か排日かそれが問題だ / 排日三昧 / 銀幕のトーゴー / 「名前が一体何だというの？」 / 女と土地 / タズミ男爵の異人種間結婚のすすめ / 汝の敵を知れ、マクラッチーの翻訳戦略 / 恋愛人種戦 / ヘンリー・ジョンソン

### 第七章 東郷二十面相——おかしな異人さんから敵の顔ができるまで

東郷視覚史 前期二〇年 / 海の彼方で——東郷と日本大正モダニズム小説 / 戦争と「ポッパガンダ」

結語にかえて ウォラス・アーウィンの手紙 / 参考文献 / 作品略記表

## < 論文の概要 >

第一章では初期のハシムラ東郷の人物造型に注目し、その矛盾撞着的特質を分析する。東郷の話す奇妙な「和製英語」は、 minstrelsy 等で培われてきたエスニック・アクセントの常套を踏襲しながらも、人と人、人と物の間の常識的区別を笑い、侵犯し、< 笑い > と < 社会批判 > の武器となった。また、一流紙に報じられた学僕（スクールボーイ）東郷の活躍は、白人優位のアメリカ社会において従来無視され、在米日系社会においても蔑視されてきた学僕が初めて社会的認知を得たことに他ならなかった。その認知においては、東郷が笑われるのと同じくらい、東郷を笑うアメリカ社会も揶揄の対象となり、だからこそ在米日系社会においても、東郷の反響は三者三様に分かれた。「日本人」が唱える黄禍論という東郷の矛盾した議論は、同時代の日米双方で物議を醸していた珍説であり、その議論の分析を通して、アメリカにとって日露戦争に勝った日本がそもそもいかに矛盾撞着した、別言するなら「東郷化」した存在であったかを提示する。最後に、東郷の肖像写真を分析し、白人大統領シオドア・ローズヴェルトでさえ、いかに「東郷化」しうるかをみることで、パロディストとしての東郷の真価を問う。

第二章では、原作者のウォラス・アーウィンとその兄でジャーナリストのウィル・アーウィンの伝記的事実を繙き、東郷誕生までの経緯を追う。アーウィン兄弟の中西部での青少年期、二人が進学したスタンフォード大学での苦学生体験と大学生文化、若きジャーナリストとして受け持ったサンフランシスコ・チャイナタウンの体験やボヘミアン倶楽部での活動、さらにはアーウィンの諷刺的詩作品にみられる感性と工夫のうちに、日本人学僕ペルソナ創造への軌跡を辿る。ハシムラ東郷と従兄のノギのコンビは、アーウィン（兄弟）にとって他者像ではなく、むしろ（戯画的な）自画像としての意義を持ち合わせていた。

第三章では、東郷の人气が頂点を迎えた1910年代を振り返り、『グッド・ハウスキーピング』誌上での長期連載を扱い、東郷がいかに賢い道化として進化/深化したかを明らかにする。東郷はこの雑誌連載ではじめて、学僕という名称通りの家内労働者となり、問題ありの使用人という道化の仮面の下から、雇い主の中産階級の主婦層のみならず、家政学に対する鋭敏な社会批判を繰り広げることに成功した。家庭内労働は日本男子のする仕事ではないと蔑まれ、その「女々しさ」が問題視されたのは、東郷のみならず、多くの現実の日本人学僕たちも同様だった。しかし東郷はまさに「女々しい」学僕だったからこそ、白人中産階級女性像とも直に関わり、笑い笑われる関係のなかでアメリカ社会の本陣たる「家庭礼賛」を落城さ

せ得たのである。

アーウィン は東郷の「性」を抑圧し、「蝶々夫人」のような性化された日本女性を描くことを避けたが、彼の同時代には、ある程度はそうした東洋（女性）観を批判するために、自ら「日本女性」の装いをまとった作家も登場した。本論文第四章で扱われるオノト・ワタンナ（ウィニフレッド・イトン）、第五章で取り上げられるヨネ・ノグチ（野口米次郎）がそうである。二人は奇しくもアーウィンと同じ1875年生まれながら、生まれ故郷も、育った環境も、受けた教育も異なるが、この三人は奇しくも同じアメリカ東海岸でほぼ同時期に活動し、イエローフェイスを各々の意匠で用いたのであった。

第四章で分析されるのは、ワタンナにとってイエローフェイスの装いは、自身の異国情緒満載の小説に「信憑性」を獲得するために必要なポーズだったということである。その上で彼女はアメリカのジャポニズムという掛け合わせの実験場にふさわしい、本当に古いものから、古さを装う新しいものまで、様々な「日本」を掛け合わせる日本小説を書いた。例えばワタンナの出世作『日本鷲』（1901年）は、日本古来の浦島伝説と、1900年のパリ万国博覧会で貞奴を呼び寄せて舞わせ話題を呼ぶ、アメリカ人舞姫兼興行主ロイ・フラワーの創作舞踏とを大胆に掛け合わせ、仮想「日本」が作り出された。

ノグチは、ワタンナのイエローフェイスの虚偽性をもっとも痛烈に批判した人物である。そのノグチがワタンナの小説と見紛うばかりに装丁された小説を二冊、ジェンダーを偽装し「朝顔嬢」のペンネームを用いて執筆していた。本論文第五章はこの朝顔嬢小説を取り上げ、ノグチの日本小説批判の骨子を検討した上で、朝顔嬢小説とは疑似日本小説に対するパロディ作品であったと論じる。ノグチはパロディという名目があればこそ、ワタンナ風の日本小説の形態と過激に戯れたが、逆にそのためにノグチの意図に反し、朝顔嬢小説はアメリカにおいて出来の悪い日本小説として受容されてしまった。

作家アーウィンの最大の謎は、親日家として在米日系社会からも慕われていた作家が、なぜ悪名高き排日小説『日ノ本』（1921年）を書いたのか、ということに尽きる。第六章は、同書にも、実は東郷に通じるアンビヴァレンスが認められることを検証する。アーウィンにとって『日ノ本』は、東郷を妖しくロマンティックな異邦人男性へと変容させた、日本人俳優・早川雪洲主演のハリウッド映画『ハシムラ・トーゴー』（1917年）への反発であり、さらには同時代に流行していた感傷的な日本小説への抵抗という意味合いも含まれていたのである。

最終章となる第七章は、東郷の黄色い顔の歴史を繙く。東郷は有力なイ

ラストレーターや写真家の手により様々な意匠／衣装を与えられることで完成し、変化し続けたペルソナであった。美白の貴公子、おしゃれなゴリラ、純朴そうな小市民、第二次大戦時の敵の顔、と変わり続けた東郷の二十面相史を視覚資料的にあとづける。なかでも、もっとも威嚇的な顔を描いたのは、日本人作家・長谷川海太郎（谷譲次）であった。かくして本章は東郷が太平洋を渡り対岸の日本で大正モダニズムの起爆剤になった証左を、谷譲次の「めりけん・じゃっぷ」作品のうちに見出す。

以上、本論文はハシムラ東郷というイエローフェイスの異人を、多岐にわたる関係のなかで「生きた」存在として取り戻し、そこには単なる東洋人戯画にとどまることのない豊かな文化文学史的意義が胚胎していたことを浮かび上がらせる。

### < 審査の要旨 >

審査委員一同は 2008 年 8 月 4 日（月）午後 6 時よりほぼ二時間にわたり、三田校舎研究室棟にて、学位請求者に対する口頭試問を行った。エドワード・サイードの『オリエンタリズム』から 30 年の歳月が経ち、西欧の東洋趣味を単純に帝国主義的支配のための戦略的類型化とみなす理論は、とうに限界を迎えている。エキゾティシズムの根本は、さほど明快に割り切れるものではない。9.11 同時多発テロを経験してしまった多民族国家アメリカは、ますます紛糾する人種問題から逃れられない。そんな時代に、宇澤氏が示したのは、むしろ 20 世紀初頭に人物造型され、いまではアメリカ文学史や文化史においてすら忘却されてしまった仮想の日本人・ハシムラ東郷のコラムが構築する独特な言説空間を分析することにより、人種・性差・階級のすべてにおいて多層的かつ複合的なアメリカの社会構造を浮き彫りする研究のうちこそ、21 世紀の現在世界の本質に最も肉薄する方法論的可能性があるのではないか、という展望であった。最も深刻な存在論的問題は、じつは最も浮薄で通俗的に見える人種差別的なユーモアのうちに潜むというゆらぎのない確信が、この論文の圧倒的な厚みを保証している。ハシムラ東郷の珍妙な和製英語のパターンを精密に分析するには、人種の政治学やアメリカン・ユーモアのみならず「アングロ・サクソン統語法に対し攻撃をしかけるほど」とも感嘆されたアメリカ英語の破格文体に通暁していなければならないが、もともと本塾大学院時代よりヘンリー・ジェイムズから T・S・エリオット、シャーロット・パーキンズ・ギルマンといった世紀転換期の英米文学の先端的文体に親しんできた宇澤氏は、着実な調査をふまえてこの困難な課題をみごとに乗り切ってみせており、その手腕には審査員一同、賞賛を惜しまなかった。

本論文はたんに埋もれていたひとりのアメリカ作家とひとりのキャラクターを発掘しただけではない。その微小とも見える手がかりをテコにして巨大ともいえるアメリカ文学史およびアメリカ文化史の根幹に衝撃を与えるところに、その最大の魅力がある。たとえば、著者はハシムラ東郷を造り出したウォラス・アーウィンが、当時アメリカ国民作家として押しも押されもしなかった巨匠マーク・トウェインと深く関わる文脈を明かさばかりか、のちにオペラとなる小説『蝶々夫人』を発表したジョン・ルーサー・ロング、同様な仮想日本人の造型を得意とした中国系英国系カナダ作家オノト・ワタンナや、本塾英米文学専攻そのものの立役者である学匠詩人ヨネ・ノグチなど、世紀転換期のジャポニズム人気と無縁ではない文学者群像を生き生きと描き出したうえで、その文脈にアーウィンに再定位しつつ、これまでのアメリカ文学史において固定してしまった正典の常識を快くも覆す。逆にいえば、従来 WASP 中心の視点で構築されてきたアメリカ文学史が、それを内部から脅かしかねない矛盾ともいえる文化をいかに巧妙に抑圧し隠蔽してきたかを、宇澤氏は文学テクストと豊富な図像を読み解きつつ、巧みに露呈させるのである。

このように魅力的な主題と緻密きわまる分析力を目の当たりにしながらも、審査委員会は、いくつかの点におけるさらなる発展可能性を指摘した。

たとえばアーウィンに賞賛したトウェイン自身が信頼し得ない語り手 (unreliable narrator) や共同体批判者としての不可思議なるアウトサイダー (mysterious stranger) を好んで用い、さらには「天真爛漫なアメリカ人」(innocent Americans) による旅行記という体裁で欧米文化を風刺したのだから、もっと両作家の徹底比較が含まれてもよかつたろう。

さらに、ハシムラ東郷の破格英語は、まさに 19 世紀から 20 世紀へ至る世紀転換期、とりわけ第一次世界大戦に立ち至る直前までの 20 年間というもの、アメリカが「スラングの黄金時代」を迎えていたこと、それを背景にした作者アーウィンは一種の言語実験の意識で珍妙なる和製英語を創造していたことが事実であれば、それはまさしく、モダニズム作家ガートルード・スタインやエズラ・パウンド、それにエリオットらが、白人でありながら黒人英語の物真似をしつつ、高度な言語実験を行っていたことと共振するわけであるから、その文脈にマイケル・ノースらの先端的モダニズム研究を接続すれば、むしろアーウィン文学をジャポニズムのみならずモダニズム文学そのものとして再構築することもできたであろう。

とはいえ、審査委員一同は、こうした環大西洋的比較研究の水準は今後の宇澤氏の仕事で建設的に達成されるものと考え、今回の主論文そのものはじゅうぶん博士の学位に価すると判断するに至った。 Oct 31, 2008